「マスク効果にエビデンスなかった」。元国家疫学者、『手記』でスウェーデンコロナ対策語る　10/28 ForbessJApann

スウェーデンの新型コロナ対策の指揮をとった元国家疫学者アンデシュ・テグネル氏（フォーブス ジャパン編集部）

2007 年、スウェーデンに移住した宮川絢子博士は、スウェーデン・カロリンスカ大学病院・泌尿器外科勤務の医師である。日本泌尿器科学会専門医取得後、スウェーデンで泌尿器外科専門医を取得している。

宮川博士はこのたび、スウェーデンの新型コロナ対策の指揮をとった元国家疫学者アンデシュ・テグネル氏の著書を翻訳、『学際的パンデミック対策:新型コロナウイルスと戦ったスウェーデン元国家疫学者の証言』（法研　刊）として上梓した。

以下は、同書についての宮川博士による寄稿である。なお、日本の読者のために行っていただいたテグネル氏へのインタビューの内容も盛り込まれている。

■スウェーデンの「ミニスターコントロール禁止原則」

筆者は、2007 年にスウェーデンへ移住後、2008 年に同国医師免許を取得し、首都ストックホルムにあるカロリンスカ大学病院で外科医として勤務してきた。

先の新型コロナウイルスによるパンデミックの際、ほとんどの国が「ロックダウン」という強硬策を採用した中、スウェーデンは「ロックダウン」を採用しなかったことは日本の読者諸氏の記憶にもあたらしいことと思う。このことは「独自路線」と評され、高齢者介護施設での死者数が非常に多かった事実もあって、「無策」であり、「人命軽視」であると誤解もされた。

だが、本当にそうだったのか。

筆者が翻訳を担当した、元国家疫学者アンデシュ・テグネル氏の著書の日本語版の裏表紙

には、元駐スウェーデン日本国特命全権大使で、現日本赤十字社常任理事の渡邉芳樹氏の推薦文が掲載されている。
渡邉氏は中で、スウェーデンには「ミニスターコントロール禁止原則」があることに言及されている。行政庁は政治から独立しており、独自の采配ができるという原則である。この原則のおかげで、他国が死亡数が増えることによる社会からの批判を怖れ、エビデンスなしに強硬な手段を選択せざるを得なかったのに対し、スウェーデンは、「社会からの批判」に影響されずに信じる道を進むことができたのである。

■医療現場の最前線で筆者が目撃した現実

2019 年に中国武漢での新型コロナウイルスエピデミック発生後、2020 年 2 月にはスウェーデンでも第一例目となる新型コロナウイルス感染者が確認された。スウェーデンには、冬季に 1 週間、「スポーツ休暇」と称した休暇があり、学校が休みになる。この期間におよそ 100 万人のスウェーデン人が国外へ旅行に出かけるが、彼らの帰国に伴い、多くの感染者が入国することとなり、スウェーデンでも感染拡大が始まった。
最も多くの感染者が発生したストックホルムでは、5 つの大病院が感染者の緊急搬送、集中治療を含む入院治療を担当した。これらの病院では、業務の一部を感染者の治療を行わない医療機関に委託するなどして通常業務を縮小し、感染者治療のキャパシティを拡大した。
中でも、筆者の勤務するカロリンスカ大学病院は、10 床の ECMO 床を含め、通常から約 400%増加させた 200 床の ICU ベッドを用意し、スウェーデンで最も多くの感染者治療にあたった。医療従事者も、本来の専門領域にかかわらず感染者治療を分担した。筆者も ICU 診療を経験したが、伏臥位の患者をガスマスク装着しながら診療する現場の壮絶さは筆舌に尽くし難いものがあった。

世界が「誤解」したスウェーデンモデル

第一波、第二波においては、感染対策を指揮するスウェーデン公衆衛生庁が毎日 14 時より記者会見を行った。この記者会見は 198 回にも及び、パンデミックで公衆衛生庁の顔となった当時の国家疫学者、アンデシュ・テグネル氏は世界的に有名となった。しかし、ほとんどの国が「ロックダウン」という強硬策を採用した中、スウェーデンは「ロックダウン」を採用しなかったため、「独自路線」と評され、高齢者介護施設での死者数が非常に多かった事実もあって、「無策」であり、「人命軽視」であると誤解された。
パンデミック対策に象徴的な「ユニバーサルマスク」を重要視しなかったことも、視覚的に「無策」のイメージを強くするものであった。
現実には「無策」には程遠く多くの制約があったが、とりわけスウェーデンが大切にしたのは「子供たちができるだけ通常通りの健康的な生活を継続できること」であった。筆者には当時小学校低学年の 2 人の子供がいるが、風邪症状がある場合には欠席すること、子供以外は校内に入れないこと、通常ランチルームでビュッフェ形式のランチを各教室で食べること以外に制約はなく、もちろんマスクも不要で、ほぼ通常通りの生活を送ることができた。

■国家疫学者アンデシュ・テグネル氏が「手記」を！

筆者はパンデミックを通じて、世界に広まったスウェーデンのパンデミック対策に対する「誤解」を解消すべく発信を行ってきた。さらにはメディアを通して得られた情報だけで

はなく、スウェーデンの感染対策を指揮したテグネル氏本人の言葉を日本語にして伝えたいと思い、テグネル氏に面会しインタビューに同意してもらった。そして、インタビューが実現する前にテグネル氏の手記本が発売されるのを知ることになったのだ。
スウェーデンのパンデミック対策を追いかけ、スウェーデンの感染者治療にも従事した立場から、この本を翻訳することは自分に与えられた使命ではないかと感じた。スウェーデン擁護の立場から発信していると、それにより発信する情報に対し色眼鏡をかけて受け取られることは必至で、情報に対する信憑性にも関わってしまう。しかし、テグネル氏自身の言葉を伝えることにより、中立の立場で真実を伝えることができると思った
今回、翻訳だけではなく、翻訳にあたり実現したインタビューの内容を盛り込んだが、そのインタビューを通して初めて私自身の誤解が解けた部分もあった。そして何よりも、テグネル氏が一行政官として国民の健康、幸せを第一に考えて力を尽くしてきたことが理解できた。地位や名誉などには興味のない、素朴で不器用だが温かく、純粋で一途な人間性を感じた。
著者、アンデシュ・テグネル氏から日本の読者へのメッセージ
邦訳タイトルに込めた「複数の学問分野を組み合わせて問題解決」の意味
筆者にとって翻訳業務は初めての経験であり、スウェーデンの出版会社、スウェーデンのエージェント、日本のエージェントへのコンタクトから始まった翻訳の旅は、多くの困難を伴うものであった。特に、苦境下にある日本の出版業界の反応は鈍く、数多くの出版社に出版を断られた。最終的に今回の出版に漕ぎ着けることができたのは、多くの知己の方々の助けがあったからこそである。
邦訳のタイトルに関しては、最後の最後まで悩んだ。スウェーデンのパンデミック対策を誤解していたり、好感を持っていなかったりする方が多いことを知っているだけに、挑発的なタイトルを付けることは憚られた。
何度も原文を読み返すうちに「tvärvetenskaplig」という言葉に目が留まった。スウェーデンのパンデミック対策では、対策によるメリットとデメリットを天秤にかけ、「感染」対策だけではなく大局的な考え方をする点が他の国とは一線を画している。
「tvärvetenskaplig」は英語では「interdisciplinary」、日本語では「学際的」と訳す。「学際的」とは複数の学問分野を組み合わせて研究や問題解決を行うアプローチのことであるが、日本語の「学際」という言葉は実は比較的新しい言葉で、1970 年代に使われるようになった。そして、その言葉は統計学者、経済学者である筆者の父、宮川公男が初めて推奨したものである（その経緯は訳本中「あとがき」に詳しく記載）。
「学際的」アプローチこそがスウェーデンのパンデミック対策の特色でもあり、テグネル氏の手記本の翻訳の後押しをしてくれた父が奇しくも推奨したその言葉をタイトルに選ぶことは、私にとって運命的に感じられた。
▪スウェーデンと日本の現状
日本ではインフルエンザ検査は日常的に行われる検査であるが、スウェーデンでは入院が必要である重症患者に限り大病院で検査を行う。新型コロナ感染症についても既に同様の扱いとなっている。入院を必要としない風邪症状で街の診療所を受診することのないスウェーデンでは、インフルエンザや新型コロナに感染していたとしても診断されることなく、人々は自宅療養で済ませる。

日本ではいまだに、新型コロナウイルス感染を警戒する報道がなされているが、スウェーデンでは新型コロナウイルスに関する報道は皆無に等しい。病院でもマスクは不要で、入院患者との面会も自由である。

「ユニバーサルマスクの効果」にエビデンスはない

マスクや面会制限に関し、テグネル氏に意見を聞いた。マスクについては、病院などの必要な場面で使用するマスクに関してその効果があることは確かであるが、ユニバーサルマスクに関しては効果があるというエビデンスはないというのが、コロナ禍以来一貫して変わらないテグネル氏の見解である。

スウェーデンでも一時期、病院でマスクの使用が義務付けられたことがあったが、マスクの使用法は医師であってもかなりいい加減であった。感染患者や免疫不全の患者の診察、手術時には正しくマスクを使用していても、それ以外では正しく使用できていない。ましてや、広く国民に推奨するユニバーサルマスクが正しく運用されるはずがないし、マスクの質に関しても雑貨程度のものも多い。

日本では、新たな感染の波を睨み、面会制限を新たに始めたり、コロナ禍以来、面会制限を継続している医療施設が存在するが、面会制限についてもテグネル氏にインタビューした。彼の答えを訳本から引用する。

「病気で苦しんでいるときや、死期が近いときなどに、大切な人と会えるということは、私は非常に重要だと思います。スウェーデンでも一時期面会制限を行いましたが、それは過ちだったと思っています。高齢者介護施設での面会禁止にも正当な理由がなく、非常に多くの無駄な苦しみを生み出しました」

▪いまだ残る誤解を解く

スウェーデンがパンデミックに「無策」で対応し、感染拡大を放置したという誤解がいまだに存在することは驚きだ。日本の感染対策に関わった尾身氏すら、東洋経済社のインタビュー記事において「あえて自然感染を止めずに感染を放置し、医療による死亡抑制に力点を置くスウェーデンのような取り組み」と述べている。

これは誤解に基づく発言である。第一波の初めから「感染拡大を抑制し、医療のキャパシティを超えないようにする」「感染に最も脆弱である高齢者を守る」ことがスウェーデンの目指すところであることは、スウェーデン公衆衛生庁の記者会見で連日のように繰り返し説明されていた。

スウェーデンはロックダウンこそしなかったものの、多くの規制が存在した。主眼が置かれたのは、ソーシャルディスタンスの徹底である。第 2 波以降では、店舗への入場も厳しく規制された。10 平米につき 1 人しか入場が許されず、人数制限厳守のために各店舗前には警備が配置された。日本ではマスクやアクリル板のパーティションが好まれたが、スウェーデンではその代わりに密を避けることが勧められたのである。

訳本をテグネル氏の元へ

先日、訳本をテグネル氏の元へ届けに行った。訳本の表紙は、スウェーデンの通信社のアーカイブから苦労して探して訳者が購入したものであるが、スウェーデンの国旗を背景に、硬い表情で斜め前方を見つめているテグネル氏の写真が目に入った時、一目で「これしかない」と強く思った。出版社の担当者は、この写真を見事な表紙にしてくれた。

写真の選択や表紙のデザインはテグネル氏自身も非常に気に入ってくれた。写真のテグネル氏は、櫛を入れず少しボサボサの髪で、ジャケットから出たシャツの襟が整えられていないといった風貌だが、「それがあなたらしい」と指摘したら、テグネル氏が「その通り」と笑ってくれた。
この本のタイトルは堅苦しく感じられるかもしれないが、内容は決して専門家向けではない。テグネル氏の仕事や生活、心の動きを、小説を読むかのように追うことができてワクワクする。また、所謂、スウェーデン礼賛の本ではない。あくまでも事実に基づき、何が成功で何が失敗であったのか、淡々と述べられている。
この翻訳（『学際的パンデミック対策：新型コロナウイルスと戦ったスウェーデン元国家疫学者の証言』アンデシュ・テグネル、ファニー・ハーゲスタム共著、宮川絢子訳、法研刊）を通して、一人でも多くの方にスウェーデンのパンデミック対策の真実を知っていただき、未来のパンデミックに向けた建設的な議論の一助となることを願っている。
テグネル氏が実践した「学際的」アプローチは、感染症学だけでなく、経済学、心理学、社会学、教育学など幅広い分野の知見を総合的に考慮し、社会全体の福祉を最優先に据えた政策決定の在り方を示している。単一の専門分野の視点に囚われることなく、複数の学問的観点から物事を捉え、長期的な視野で国民の幸福を追求したその姿勢は、今後の危機管理においても重要な示唆を与えるものであろう。
テグネル氏の誠実な言葉とその背景にある「学際的」な思考が、日本の読者にも必ず届くと信じている。
宮川絢子（みやかわ・あやこ）◎スウェーデン・カロリンスカ大学病院・泌尿器外科勤務。平成元年慶應義塾大学医学部卒業。スウェーデン泌尿器外科専門医、医学博士、カロリンスカ大学およびケンブリッジ大学でポスドク。2007 年スウェーデン移住。スウェーデン人の夫との間に男女の双子がいる。
Forbes JAPAN 編集部